

# 米国在外研修記

著者	金 愛慶
雑誌名	名古屋学院大学論集；医学・健康科学・スポーツ科学篇
巻	1
号	2
ページ	25-31
発行年	2013-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15012/00000028">http://doi.org/10.15012/00000028</a>

## 米国在外研修記

金 愛 慶

私は、San Francisco State University（以下、SFSUと表記する）から招聘を受け2011年9月から2012年8月までの1年間米国在外研修に出かけて来ました。

SFSUは、23あるカルフォルニア州立大学機構の一支部で1899年に創立され、レイクマーセド（Lake Marced）地区にメインキャンパスを、ダウンタウンにビジネススクールのキャンパスを構え、学部においては124分野、大学院では105分野のコースを提供しています。米国全州と世界約100か国からの3万人以上の留学生を抱えており、多くのエスニックマイノリティの学生に学位を授与している大学として常に全米20位以内にランクされるほど、多様性（diversity）に富んだ国際色豊かな大学です。また、SFSUは国際関係学（IR: International Relations）の学問発祥の地として、その名前を冠する全米初の学科が設立されたことでも有名であり、TESOL（Teaching English to Speakers of Other Languages）大学院は全米で最も優れたプログラムであるとして頻繁に取り上げられています。SFSUのこのような多国籍・多文化を尊重する学風は、比較文化心理学の観点から多文化主義（Multiculturalism）の研究を行っている私にとっては非常に有難い環境であったと言わざるを得ません。SFSUは住宅地に隣接しており、1時限目の授業が始まる前は限られた無料駐車スペースを確



写真1 SFSU国際教育館の前で

保したい学生の車で道路が埋め尽くされる光景は見物でもあります。

私は、比較文化的観点からの「情動と顔の表情」研究で著名なSFSU心理学科のDavid Matsumoto教授にお世話になりました。彼は、米国生まれ育ちの日系アメリカ人で日本語も非常に堪能である故コミュニケーションが取りやすかったのは非常に助かりました。Matsumoto教授は微小表情(Microexpression)研究の世界的権威者である一方で、黒帯7段の柔道家という異色の経歴の持ち主でもあり、心理学者と柔道家のどちらが本職なのか分からないほど柔道に打ち込んでいることも印象的でした。彼に初めてお会いした時、私は長身で大きな彼の体格に圧倒され思わずグリズリーベアを連想してしまいましたが、彼は私の在外研修がより豊かなものになるように様々な面で配慮を惜しまないなど、寛大な人格の持ち主でもありました。

Matsumoto教授の様々な配慮のお陰で米国の多文化カウンセリングの実践を学びたかった私は、日・米・韓の3か国の多文化主義に関する国際比較研究を進めながら、同時にPalo Alto UniversityのStanley Sue教授が所長を務めるCenter for Excellence in Diversityの客員研究員として、彼の研究チームの共同研究に参加することができました。中国系アメリカ人であるSue教授は、米国臨床心理学界の巨匠であり、UCLAとUC Davisの教授、米国Western Psychological Associationの会長を歴任したほか、多くの研究業績から数々の研究賞を受賞した優れた研究者です。

私は、Sue教授のお誘いで「米国の民族・人種間における精神疾患有病率の差」に関する共同研究に参加することとなり、各週開かれる研究会に参加し、民族・人種間における精神疾患有病率の差やその背景としての民族・人種間の文化差に関する多くの研究結果に触れることができました。ところで私は日本留学を決める前に米国留学を準備していたこともあって英語には比較的自信があると思っていましたが、研究会での学術的討論となると五里霧中の状態に陥ることもしばしばでした。一度文脈を見失ってしまうと何が話されているのか、全く要領を得なくなってしまう始末でした。

或る日の研究会でのことでしたが、アジア系アメリカ人の精神疾患有病率がアフリカ系とラテン系に比べて非常に低い、という調査結果を巡る討論の最中、或る研究者が自分のコメントの途中に私に話しかけてきましたが、私はそれが単に彼自身の意見や理解に間違いはないのかと私に確認をしているだけだと思い、同意の意味で何度か大きく頷いてニコリして見せました。ところが、皆が一斉に私の方を向いて何かを待っている様子を見てようやく私自身のコメントが求められているのだと気がつき、慌てて質問内容を改めて確かめたことを思い出します。それからしばらくメンバー達は私に何か質問をする際には笑顔で“これはあなたへの質問ですが”という前置きをするようになり、堅苦しい研究会が時々笑いに包まれました。

何事もウィットに変える私の共同研究者達は、私の下手な英語を少しも気にせず、ゆっくりとした口調で繰り返し言葉を掛けてくれたり、適切な英単語が思い浮かばず言葉に詰まる時はさり気なくその言葉を代わりに言ってくれたりしました。英語を母語としない人とのコミュニケーションに大変慣れている彼らのこうしたおらかな雰囲気は私にとっては救いとなり、言語のバリアを恥じず色々なことに挑戦する勇気を与えてくれました。

そのお陰で、私はSue教授とWestern Psychological Association (92th Annual Convention)においてシンポジウムを共同企画し、『Ethnicity And Mental Health: Surprising Findings in Need of an

Explanation」というテーマで共同研究の成果の一部を発表するチャンスにも恵まれました。国際学会でのポスター発表は何度か経験したことがあるものの、英語を第3言語とする私にとってシンポジウムは大きなチャレンジでもありました。発表原稿の準備はさることながら、予想される様々な質問に対するコメントを用意する作業はかなりの時間と努力を要求しましたが、ポスター発表とは異なる緊張感と達成感を味わうことができたことは、米国研修の最大の成果であったと振り返ります。



写真2 WPA シンポジウム会場で

ご縁は更なるご縁を呼ぶもの！ Sue教授の研究所があるPalo Alto Universityは、元来心理学の大学院大学であったPacific Graduate School of Psychologyを再編した私立大学ですが、心理学の大学院では近くのStanford Universityと提携して多文化カウンセリングに関する優れた教育・実践プログラムを提供しています。私は、両大学の大学院の授業を度々聴講しておりました。お洒落なStanfordの学生達に混じってサンダルとジーンズというラフな服装で美しいキャンパスを歩いているとまるで自分の学生時代に戻ったかのようなノスタルジーと解放感を覚えました。

こうした自由気ままな生活の傍らに私はPalo Alto UniversityのLeonard Beckum教授が担当する「Cultural Competency Professional Development Training」のコースでは客員教授として「日韓の心理臨床の理論と実践」に関連して計5回の講義を担当したほか、Beckum教授並びその受講生達と多文化カウンセリングで強調されている「多文化能力・多文化感受性訓練」に関して多くの意見交換ができたことは米国多文化の実情を知る上では予想外の収穫でした。

このコースの受講生達は、白人系・アフリカ系のアメリカ人よりもアジア・中東・南米からの移民がより多くを占めており、各種専門分野において既に活躍している社会人がその殆どでした。よって、学生と教授という身分の違いはあるものの、多文化カウンセリングの理論や実践に関する専門家同士の多様な意見交換ができたことは多人種・多文化のカリフォルニアならではの利点であったと言えます。

また、Stanford UniversityとPalo Alto Universityの博士課程の院生達が臨床実践のインターンシッ



写真3 Stanford大学のキャンパスで



写真4 大学院での講義の様子

プを受けているAACI（Asian Americans for Community Involvement）内には、多言語による多文化カウンセリング・サービスを提供しているMental Health Services部門があります。私はその優れた実践的取り組みに関する見聞を得る機会が与えられ、日本における外国人の臨床心理学的支援に関する多くの実践的示唆を得ることができました。

このように私は多くの研究者達と知り合いになり、彼らの助力を得て多文化カウンセリングの実践に関する見聞を広げられた一方で、私生活においても大変充実した1年となりました。サンフランシスコは、多くの映画のロケ地としてスクリーンに登場している坂道とケーブルカー、ビクトリア調の建物が整然と並ぶ美しい街並みが有名ですが、都心に位置した多くの大学がそうであるようにSFSU





写真5 AACIのスタッフ達と

は教職員や学生に提供しているキャンパス内外の住居への入居希望者が非常に多く家賃も高いです。よって、多くのSFSUの教職員や学生は相対的に家賃と物価の安い近郊の町に住んでおり、フリーウェイ（高速道路）を使った自家用車、または近郊通勤電車であるバート（Bert）での通勤・通学を選ぶ人が多いです。世話人であるMatsumoto教授のアドバイスもあり、私も学内の寮を選ぶ代わりにサンフランシスコからフリーウェイで1時間くらい離れ治安も良いサニーベール（Sunnyvale）市に住居を構えました。

カルフォルニアは自然環境にも恵まれていてヨセミテ、レッドウッドといった雄大で美しい国立自然公園があります。私が通勤ルートとして利用していたルート280沿いも草で覆われたなだらかな丘が連なっていて、視野を遮る人工物があまりないので青い空とコントラストを成しながら果てしなく続く大地の雄大さを存分に感じる事ができ、通勤時間は自然との一体感を味わえる憩いの時間でもありました。

カルフォルニアは美しい自然のほかにも地中海気候のような穏やかな天候にも恵まれており、北米で最も住みやすいところですが、私の臨時ホームタウンとなったサニーベール市はその名に相応しく朝から太陽の光が燦々と注がれ、年間通して綺麗な花が咲き誇るところです。冬季でも屋外の温水プールで泳いだり、プールサイドで肌を焼いたりしている人がいて、カルフォルニア人達の良く焼けた小麦色の肌へのこだわりのようなものを感じました。大学の寮ではなく地域社会の中で生活の基盤を整えることは様々な面で煩雑ではありますが、現地の住民とコミュニケーションを図れるという良さもあり、私は同じアパート団地の住民達とも知り合いになり、度々ホームパーティに招かれるなど、プライベートなお付き合いでも楽しい時間を過ごさせて頂きました。

イベント好きなアメリカ人はハロウィーンとクリスマスの家の装飾に非常に凝っていて、インターネット上のコンテストに自らノミネートしてその出来栄の素晴らしさを競っている人も多く、一般



写真6 ヨセミテ公園のトンネルビューの前で



写真7 友人宅のホームパーティで

の住宅街を歩くだけでもまるでテーマパークに来たかのような華麗なイルミネーションを楽しむことができました。また、サニーバール市はシリコンバレーを作り上げている主要都市の一つでもあり、IT関連の多くの主要企業がこの周辺に集まっている関係で、IT関連の仕事に従事する世界各国からの移民や駐在人達も多く住んでおり、彼らの食を支えるエスニックレストランやスーパーマーケットもたくさん散在しています。昼休みに多様なエスニック料理を食べ歩くこともこの地域ならでの楽しみでした。

私の研究の主な関心は移民の地域社会での適応に関するものでしたが、私は地域に入り込んだ自分の生活を通して様々な移民問題の実態を間近で見ることができました。渡米して2か月ほど経った或

る日のことですが、ダイレクトメールで送られてきたクーポンの中に通常40ドル以上する車体内外のフル洗車が12ドルで受けられると書かれたものを見つけたので急いで洗車場に向いたのですが、おそらく不法労働者と推測されるラテン系スタッフ達がずらりと並んでこの仕事にあたっていました。彼らは時給5〜10ドルという非常に安い賃金で雇われ、勿論労災や年金といった社会保障の対象にもなりません。米国はこのような不法移民による経済活動に支えられつつも、社会保障の負担や犯罪率の増加を懸念して不法移民の救済策はうまく進んでおらず、地域社会の中でも彼らは影の存在として生きざるを得ない現状がそこにはありました。同伴した私の娘が通っていた現地の小学校にはこうした不法滞在家庭の児童も多数在籍しており、全く英語が話せない保護者達のためにスペイン語専門の事務スタッフが配置されていたことやラテン系の親に対する保護者会が別途設けられ生徒の学業問題への関心と呼びかけたり親を対象とした英語教育プログラムへの参加を促したりしていたことも非常に印象深かったです。

また、小学校ではカルフォルニア州が定めている学業達成基準に達していない生徒を対象とする放課後学習プログラム（Kids Learning After School）が州政府からの補助の下で設けられていて、学業援助のほかにも生活態度の改善や自尊心の増加を教育目標とした多様なプログラムがほぼ無償に近い形で提供されていたことも非常に印象深かったです。このプログラムの利用者の殆どが不法移民の家庭や英語を母語としない移民1世の家庭の生徒達であり、こうした家庭の児童への学習権を保障し、学力の底上げを図っていることに大きな感銘を受けました。私の娘もこのプログラムに参加していました。その教育的効果に個人差は大きいと思いますが、全く英語の話せなかった娘が3か月ほどで片言の英語で他の児童と楽しそうに遊んでいる姿を見て、移民家庭に対するプログラムの有効性を実感することができました。なお、カルフォルニア州は大変な財政赤字を抱え、様々な教育予算をカットせざるを得ない中でも英語を母語としない生徒への教育支援の予算を維持しており、弱い者ほど守るべきというアメリカ人の懐の大きさを感じることができました。

以上のように私の米国研修は、研究と生活の両面において大変充実したものでした。日本に帰ってきた今も私は米国で築き上げた研究ネットワークを生かして日米の共同研究を進めており、このネットワークは今後私の研究者としての道を歩む上では代えがたい貴重な資源となることでしょう。このような貴重な機会に与ることが出来たことは実に光栄なことであり、改めて米国長期研修の機会を与えて頂いた名古屋学院大学の皆様に深く感謝の意を表したいと思います。